

学ぶ力を育む「やりくり」授業の提案

—鳥取大学附属中学校の研究主題について—

中尾尊洋

鳥取大学附属中学校 研究主任

E-mail: nakaot@tottori-u.ac.jp

NAKAO Takahiro (Tottori University Junior High School) : A proposal of "YARIKURI" classes to nurture ability to learn. — On the subject of research at Tottori University Junior High School —

要旨 — 本稿は、研究主題に掲げている「やりくり」授業に関して、社会的な背景と教育実践における方法について解説し、鳥取大学附属中学校の各教科で実践されている内容に対して、補助的な説明を行った。本研究では、「やりくり」という日常生活の文脈における感覚的な言葉を用いることで、教職員全員の理解を深め、今後到来が予想されている予測不可能な時代に対して、どのような授業で応えるのかを模索した。鳥取大学附属中学校の研究が様々な中学校において、役立つことができれば幸いである。

キーワード — 研究紀要概要, 中学校の授業, 「やりくり」授業

Abstract — This report describes social background and practical methods in junior high school education, conscious of "YARIKURI" which was the main theme of the present research. In addition, it gives supplementary explanations on the contents of educational practices for each subject in the Tottori University Junior High School. In this bulletin, all the teachers tried to deepen their understanding on the active learning and improve their educational skills using a sensory word "YARIKURI" which is often used in everyday life. Further, we tried to find an answer for the issue how we should teach students in the upcoming unpredictable era. We hope that our studies in the Tottori University Junior High School would be of some help for all the educational staff in various Junior High Schools.

Key words — “YARIKURI” -conscious classes, Outline of the research bulletin, Class of Junior High School

1. はじめに

2019年度、鳥取大学附属中学校（以下、本校）では、研究主題を“学ぶ力を育む「やりくり」授業の開発”と設定した。それまで副題であった「やりくり」という言葉を主題の中で使用している。この理由は、これまで本校で継続してきた”生徒に「やりくり」させる授業“が、これからの時代を生きる生徒の力に重要な効果をもたらすとの感触が教職員の中に得られていたためである。これまでの研究において、「やりくり」は生徒が学習場面において身につけた力を生かして、新たな問題を見抜く、または、新たな問題に対して工夫して対応すること、と定義している¹⁾。今年度からは、既存の知識や技能、生活経験などを駆使した、問題を解決するための思考を伴った行為、と定義を検討しな

した。これまでの定義では、活用される力が「学習場面で身につけた力を生かして」となっていたように、限定された力を対象としていた印象があった。また、「新たな問題に対して工夫して対応する」としていたが、状況によっては対応しないことが最善であることも考えられ、工夫することに縛られている印象もあった。新たに検討した定義により、「やりくり」の適用範囲が広がり、教員が授業設計する際に、より効果的に生徒の「やりくり」をイメージできると考えている。

本校の研究スタイルの特徴は、全教科で同じ教育課題を捉えた統一した方向性の中で、各教科独自の視点を軸に研究を進めていることである。特定の教科に特有の教育課題に向き合うのではなく、教育全体を俯瞰した教育課題に対して各教

科が向き合い、教科の研究に落とし込んでいく。このような研究スタイルを実現するために重要なキーワードが「やりくり」である。したがって、「やりくり」の定義は重要な意味を持つと考えるのである。2019年度より新たに設定した研究主題および「やりくり」の定義により、今後一層混迷を深める社会において、生徒ひとりひとりが自らのアイデンティティを確立し、社会の形成者としての自覚を深めることができるような授業のあり方を探っていきたいと考えている。

2. 社会に求められる人材

社会の変化は激しく、未来を予測することが困難な時代をむかえたと考えられている。そのような社会の中では、ただ受動的に事態を受け入れて状況に対応する考え方では、社会に参画する生き方、自己の成長、幸福な生活、協力的な社会形成の主体者といった、目指される社会に貢献できる人材の育成は困難と考えられる²⁾。また、かつて日本は科学技術の面で最先端を誇っていたものの、現在では、AI研究などの分野においてアメリカ、中国等と比較して存在感を発揮できていないと言われている。このような状況の中で、内閣府ではSociety5.0の構築に向けて、多方面への改革の必要性を指摘しており、新たな価値を創造することができる人材育成の課題として、学校や学びのあり方に対して方向性の整理をしている³⁾。そこでは、学びの基盤が固められることが求められ、これまで以上に教師の役割が重要であることが述べられている。とりわけ、従来の学びに見られた一元モデル(「〇〇だけ」の構造。例えば、学校経営が教職員だけによるものから、外部専門家を交えたものが求められている。)からの脱却が重要視されており、学校での授業も、ICTの活用や外部人材の活用、教育方法の拠り所としてのエビデンスやビッグデータの活用が推進されると考えられる。

本校の掲げる「やりくり」授業は、これまでの研究によって、単に知識を記憶させるだけの学習からの転換を図ってきた。生徒に新たな価値を生み出させる学びのあり方を提示してきたという点で、上記のような社会的背景に対して、時代の要請に大きく応える内容であったと考えている。しかし一方で、「やりくり」授業の具体的な方法を提示して

生徒の成長を論じてきているものの、「やりくり」授業が生徒のどのような部分にどのような効果をもたらすのかという詳細な部分については、これまで明らかにできてはいない。この点に関して、今後の研究において深く探っていく必要があると認識している。

3. なぜ「やりくり」授業か

本校では、生徒に「やりくり」させる授業の展開について、各教科で具体的な実践例を提示してきている。それらの具体的な授業の実践例を通して、教師の感覚をもとにした効果のまとめにおいて、生徒が授業で「やりくり」することによって「認識の深化と知への欲求」、「思考の拡散」、「言語活動の定着と意欲」という3つの傾向が得られることを明らかにした⁴⁾。これらの傾向は教師が生徒の活動を観察しつつ気づいたものを分類したものであり、信頼性や妥当性を客観的に評価しているものではない。しかし、日常的に授業実践している当事者としての実感であり、近い部分に「やりくり」させる意義が存在すると思うことができる。すなわち、「やりくり」することによって、複雑な知識構成への影響や知識獲得に対する意欲、思考・判断・表現に関して自分の知識を探索する範囲の拡大、知識の不足を補ったり定着させたりする活動および意欲、等に対する効果が推察される。このような部分に効果を得ようとするのが「やりくり」授業の意義といえよう。

また、上記の「やりくり」授業によって期待される効果は、文部科学省によって2017年に告示された学習指導要領における、新しい時代に必要となる資質・能力の3つの柱と重なる⁵⁾。つまり、本校が長年に渡って培ってきた、「やりくり」授業によって効果が期待できる部分は、新しい時代に必要な資質・能力を育成するものでもある。学び方においても、学習指導要領では主体的・対話的で深い学びの必要性が論じられているが、「やりくり」授業は、上記の効果を期待するものである以上、主体的・対話的で深い学びを実現してきたと言える。つまり、主体的・対話的で深い学びを実現するキーワードが「やりくり」であると考えられる。

4. 「やりくり」授業の作り方

「やりくり」授業は、生徒が自ら問題を解決していく文脈の設定およびそれに伴う既存の知識や技能、生活経験を駆使した思考活動が必要な学習である。新たな知識をあらかじめ与えてトレースさせたり反復練習させたりするような学習ではない。藤村らは、前者を「わかる学力」を目的とした学習、後者を「できる学力」を目的とした学習と呼び、それぞれの学力に焦点をあてた学習を両輪として機能させる必要があると述べている⁶⁾。つまり、「やりくり」授業を作るにあたっては、学習内容となる単元を見渡し、生徒の「やりくり」によって学習させる場面と知識・技能を反復練習的に獲得させる場面とを分類しておく必要がある。その上で、「やりくり」によって学習させる場面で何を「やりくり」させるのか、いわゆる学習の目的を設定する。ここで「やりくり」を引き出すために重要なのが、単一の解答や解答方法となる問題を設定しないことである。藤村らはこの問題設定を「非定型の問題」と呼び、この問題設定の工夫によって生徒の多様なアプローチを引き出すことを提案している。本校の「やりくり」授業の展開については、ほぼ藤村らの提案に沿っている(図1)。また、詳細については、過去の研究紀要に記載している^{1,4)}。

現状で全ての授業を「やりくり」授業に置き換えることは困難であるし、反復的な学習方法が適した場面も考えられる。しかし、本校においてこれまで実践してきた「やりくり」授業を継続し、さらに新たな「やりくり」授業を創造することが重要であるとの認識を強く持っている。

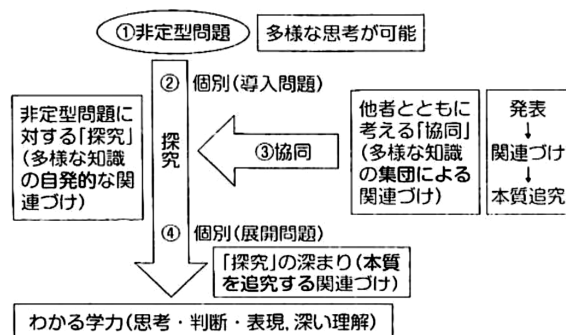


図1 協同的探究学習(協同的探究学習で育む「わかる学力」(藤村宣之ら)より転載)

5. 今後の展望

5.1 「やりくり」の評価

これまでの研究では、「やりくり」の成果として具体的な生徒の姿を例に挙げて論じてきた。当然、学校教育は各教科の取り組みや行事、日常生活等の総体として形成されているものである以上、表出している具体的な生徒の姿が何の取り組みの効果を得たものかを示すことは困難である。したがって、具体的な生徒の姿として示すにあたって、その示された姿に到達するための「やりくり」の力の因子を分析することが必要である。これに関しては、依然として明確に示していない部分であり、今後の課題である。その方法も、統計的な分析だけに頼るのではなく、学校現場の研究としての特徴を生かし、教師の意識や意図を含めて経験的に得られるデータを対象とすることが考えられる。

5.2 「やりくり」授業の創造

学校現場の研究活動の目的のひとつは、効果が得られる方法論の創出である。つまり、本校で取り組んでいる「やりくり」の研究は、同時に効果のある「やりくり」授業の実践例を多く挙げることでもある。本校では、2015年度より「やりくり」というキーワードを用いて研究実践に取り組んできた。毎年各教科で「やりくり」授業を提案してきているものの、今日の教育課程を網羅するには、まだまだ十分な事例を積み上げているとは言えない。また、これまでに提案している「やりくり」授業も、教師の経験が重なることによって深みのある新たな「やりくり」授業へと修正されていくものでもある。今後も各教科で多くの「やりくり」授業を提案し、日本全国の様々な学校において、役に立つことができれば幸いである。

参考文献

- 1) 中尾尊洋：自立し、つながり、探究し、創造する力を育成する学校教育の研究～鳥取大学附属中学校における実践を通じて～、鳥取大学附属中学校研究紀要、第49号、pp.5-15、2018
- 2) 中央教育審議会：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/

- chukyo0/toushin/1380731.htm, 最終アクセス 2020年1月15日
- 3) 内閣府：科学技術基本計画, <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5honbun.pdf>, 最終アクセス 2020年1月15日
- 4) 中尾尊洋：自立し, つながり, 探究し, 創造する力の育成～「やりくりのたとえば」から見えてきたもの～, 鳥取大学附属中学校研究紀要, 第50号, pp.3-8, 2019
- 5) 文部科学省：新しい学習指導要領等を目指す姿, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chchuk3/siryo/attach/1364316.htm, 最終アクセス 2020年1月15日
- 6) 藤村宣之, 橘春菜:協働的探究学習で育む「わかる学力」, ミネルヴァ書房, 2018

なお, 本校研究の一部は公益財団法人博報堂教育財団による第14回児童教育実践についての研究助成を受けている。